

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究
分担研究報告書

我が国の新診断基準を用いて解析した新潟大学での ACLF 症例の Real World Data

研究協力者 寺井 崇二 新潟大学消化器内科学分野 教授

研究要旨：本邦で Acute-On-Chronic Liver Failure (ACLF) の診断基準案が本研究事業で作成されたのに基づき、新潟大学でも改めて基準案に沿って症例の見直しを行ったところ、予後不良症例が的確にとらえられており、診断基準案は妥当と考えた。

共同研究者

土屋淳紀 新潟大学医歯学総合病院 講師

はこの診断基準を満たす 8 例 (A 群) と診断基準に近い 8 例 (B 群) の原因、増悪因子、重症度、予後を比較した。

A . 研究目的

Acute-On-Chronic Liver Failure (ACLF) の診断基準が本邦でこの度作成され、明確化された。この診断基準の作成を契機に当科でも ACLF 症例を後ろ向き解析で行ってきたが、今回改めて 2008 年 4 月 1 日から 2018 年 10 月 31 日の約 10 年間に当施設で加療された ACLF を強く疑う症例に対して、特徴、予後などについて検討した。

B . 研究方法

2008 年 4 月 1 日から 2018 年 10 月 31 日の期間内において「肝不全」「非代償性肝硬変」の病名登録のあった 383 名のうち、慢性肝障害がベースにあり急性に増悪した経緯を持ち、かつ総ビリルビン値が 5.0 mg/dl 以上かつプロトロンビン時間活性が 40%以下となった患者を抽出したところ 8 名が該当した (A 群)。一方、その抽出過程において、ACLF に類似する病態だが、今回の診断基準でともに満たすことを要求されている血液検査項目の T-Bil と PT について、いずれかを満たすものも 8 例存在していることがわかり、今回

C . 研究結果

肝硬変の背景や急性増悪の契機については両群ともアルコールが多くまた、増悪因子としては出血と感染が多く大きな差異は認めなかったが、A 群は B 群に比較して有意に平均年齢は高かった (A 群 : 60.9 ± 10.3 、B 群 : 47.0 ± 6.5)。A 群では 8 例中 6 例が死亡の転帰をたどっており更に、8 例中 4 例は診断時の重症度が Grade 0 であったが、経過中に重症度が進行し死亡する例も多く認めた。一方で、B 群では死亡例は 8 例中 1 例のみであり比較的予後は良好であった。A 群、B 群合わせての解析では急性増悪を起こすと 16 例中 14 例は発症時に Child-Pugh 分類の悪化を認め、そのうち 11 例はその後 Child-Pugh 分類は悪化したままであった。

D . 考察

ACLF は死亡率の高い疾患群であり、早期からの適切な治療介入のためにも診断時の病状進行予測の根拠となる診断基準は大変有用と考えられる。今回の診断基準を満たす症

例は予後の悪い疾患が集積されていることが改めてわかり、診断として良く抽出されていることがわかった。重症度の grade が診断時低いものであっても予後良好とは判断できず、経過中に繰り返し評価することが必要と考えられた。また ACLF 発症後は死亡例でなくとも肝機能は悪化する可能性が高く、肝硬変患者の経過観察において急性増悪を防ぐことや急性増悪後に行う新規治療の開発が肝機能を維持するためにも重要であることが改めて確認された。

なし

3.その他

なし

E . 結論

新潟大学でも改めて本邦で作成された ACLF の基準案に沿って症例の見直しを行ったところ、予後不良症例が的確にとらえられており、診断基準案は妥当と考えた。

F . 研究発表

1. 論文発表

Nojiri S, Tsuchiya A and Terai S.
Re-examination using newly proposed diagnostic criteria of acute-on-chronic liver failure in Japan. Hepatol Res. 2019 Jan;49(1):118-119.

2. 学会発表

土屋淳紀、高村昌昭、寺井崇二・我が国の新診断基準を用いて解析した新潟大学での ACLF 症例の Real World Data・第 55 回総会 日本肝臓学会総会 2019 年 5 月 30 日(京王プラザホテル)

G . 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録